

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 英語教授学領域  
松永 志野

【論文題目】

L1・L2 ライティングのプロセスと方略に関する比較研究

【授与する学位の種類】 博士（文学）

#### 【論文審査の結果の要旨】

本論文は、英語を専攻する大学生と教職経験者(大学院生)が、L1(日本語)とL2(英語)のライティングを行なった結果に基づいて、ライティング・プロセスと方略がL1とL2で異なるかどうか、また、L2能力の違いがライティング・プロセスと方略にどのように影響するかを、主として事例研究等の質的アプローチにより明らかにすることが研究目的である。

本論文は、大学レベルのライティング研究の背景を調査するため、高校の英語・国語教師(248名)を対象とした、ライティング指導に関するアンケート調査と高校生(88名)に対する、L1のライティング方略に関するアンケート調査を行うとともに、英語・国語教師(7名)に対する、ライティング指導に関するインタビュー調査を実施し、量的・質的な方法により事前調査を行なっている。結果として、高校では「計画」「評価」を含むメタ認知方略の指導が、特にL2ライティングであまり為されていないことが判った。

理論的背景を踏まえて、Hayes & FlowerのL1のライティング・モデルを基盤とし、Bereiter & Scardamalia、Sasakiのモデルを、L2能力のライティング・プロセスへの影響を考察する際に参考となる理論モデルとして提示し、本研究の位置づけを行なっている。また、先行研究事例に基づいて、課題に取り組む間の考えをプロトコル・データ(発話データ)として記録・収集する思考発話法は、課題終了後に思考内容を報告する回顧法よりも、認知プロセスをより正確に反映する方法であると指摘している。

L2能力を変数としたL1、L2のライティング・プロセスと方略を、思考発話法により調査した先行研究は少ないとしている。事前のライティング方略と動機づけに関するアンケート、観察、事後の補足インタビューも行い、多角的なデータの三角測量に基づいて分析している点は、妥当性のある方法としての意義があるといえる。プロトコル・データのセグメント化(分析単位に分けること)の後に、筆者を含めて2名で、ライティング方略をコード化しているが、カッパ係数による結果の一致度が高く、信頼性の高いコード化を行なっている。また、10名の被験者を、L2能力診断テスト(CELT)の結果により、L2能力の高い学生、L2能力の低い学生、L2能力の高い教職経験者の3つのグループに分け、L1、L2のプロダクト(書かれた作文)の評価結果、使用されたライティング方略について、統計手法(Kruskal-Wallis検定等)を用いてグループ間で比較分析している。さらに、同じ書き手のL1、L2のライティング・プロセスの比較は未開拓の研究であるが、事例研究のアプローチに基づいて、個々の被験者のデータを多面的かつ深く掘り下げて時系列で分析し、パターン・傾向を探索的に発見・分析している点は、質的研究として評価できる。

分析の結果として、ライティング・プロセスには個人差があるが、L2能力が高い学生グループが、個人内ではL1とL2が最も類似しており、L2でも「構成計画」「アイデア創出」「メタコメント」「包括的評価」等の方略を使用し、L2プロダクトの質も最も高かったとしている。また、L2能力の

低い学生グループでは、L1とは異なり、L2では「包括的評価」が使用されず、L1からL2に直すための「局所的計画」が顕著に多く、L2プロダクトの質も最も低かったとしている。全体的に、L2の方がL1よりも、包括的なメタ認知方略の使用が難しくなる傾向があるが、L2能力が低いほどその傾向が強くなると考察している。また、L2能力が高い学生グループが、L2能力が最も高い教職経験者グループよりも、L2プロダクトの評価が高く、L1とL2のライティング・プロセスがより類似していた点は、事後インタビューとアンケートの結果から、学生グループの方が、授業等でライティング指導を受けた経験が多く、動機づけが高かったことによると推察しているが、考察の妥当性を高めるためには、更なるデータ収集・分析が求められる。

本論文が、理論的観点から、Hayes & Flowerモデルの「推敲」においては、書かれたテキストだけではなく、書かれる前の「計画」段階のものに関する「評価」と、「計画」に基づく「モニター」と「修正」が含まれる必要があるとしている点は、探索的な研究に基づく理論モデルへの示唆として評価に値する。また、初心者と熟達者の区別に基づく Bereiter & Scardamalia の L1 モデルと Sasaki の L2 モデルは、本研究の L2 能力の異なる書き手によるライティングと概ね一致するとしている。さらに、日本人英語学習者を対象とした Sasaki のモデルには含まれない「推敲」のプロセスの検討には、本研究の成果が寄与できるとしている。最後に、事前調査の結果も踏まえて、L2能力の低い書き手には、「テーマの計画」「構成計画」、「包括的評価」、プロセスをモニターする「自問」、テキストの一貫性を評価する「読み返し」等のメタ認知方略の指導が必要であるとし、L2ライティングでの包括的方略の使用による認知的負荷を軽減するために、足場かけとして L1 を使用する旨の提案をしているが、貴重な教育的示唆である。

以上により、本論文が博士(文学)の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した。

#### 【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成24年1月13日(金)に、審査委員会委員5名の出席のもとに実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表がなされた後に、口頭試問が行なわれた。本人により、学位論文の成果及び関連領域の専門的学識に基づいた応答が適切になされ、申請された学位論文が博士の学位を授与するに値する水準にあることが確認された。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

#### 【審査委員会】

主査 山下 徹  
委員 小林 美代子  
委員 福澤 清  
委員 船山 和泉  
委員 千島 英一